—随想—

不正義と反知性

八木三男

一、不正義

一、

ブッシュによるイラク侵略以来テロ事件は急増し、アメリカの発表では〇四年の世界のテロは六五一回、前年の三倍である。イラクではこの二年半でアメリカの攻撃とテロによる死者は三万人に近い。無辜の民衆を標的にするテロは憎むべきだが、もともとは子どもや無辜の民衆の殺戮もふくめて、なにもかも破壊しつくすブッシュの不正義の侵略戦争のせいだ。それを日本がブッシュのいいなりになって支援し、共同しつづける。

以上のことはいまさらいわずもがなのことで、いわば行論上のマクラのようなものだ。それはお許し願うとして、ふと『永遠平和のために』(岩波文庫)のなかでカントが引用しているギリシャ人の格言(出典不明)を思い出したのである。「戦争は邪悪な人間を取り除くよりも、かえって多くの邪悪な人間を作り出す」。にもかかわらず、戦争はなにか人間性を高貴なものにするとして賛美するものがいると、カントは苦りきるのである。

イラク戦争そのものや、戦争を推進する米日の自国民に対する政治的抑圧体制の強化の問題はいまは措くとして、邪悪さを増したのは、イラク戦争を推進する侵略者である国の支配層とその同調者たちである。不正義の国では、かれらはその邪悪な意図を露わにし、不正義の主張を公然と掲げるようになった。それらをメディアが黙認するから、いっそう醜悪さを露骨にする。カント流を反語的にいえば「悪い国家体制からは国民のよい道徳的形成は期待できない」

ブッシュを支える保守派の高名な聖職者が、アメリカ風の新自由主義政策に反対し、国民の「参加型民主主義」を推進するベネズエラのチャベス大統領の暗殺を教唆し、石原都知事がいまどき国連憲章を信じているバカはいないと挑発的言辞を弄するなどである。

周知のように、国連憲章はその前文の冒頭で「われらは一生のうちに二度までも言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救」うのが目的だと宣言したものだ。世界の恒久平和と人権の拡張を基本理念とし、われわれの子孫のために世界の平和の枠組みを規定した人類の到達点である。その辺の原理をカントの前掲書に即していえば、次のようになる。

言語や宗教のちがいは、諸民族がたがいに憎しみあい戦いあうきっかけにもなるが、しかし、文化の向上につれて相互理解も進み、その結果諸民族間の平和が「きわめて生き生きとした競争による力の均衡」のうえに築かれるようになる。カントはこれを自然が諸民族の混合を妨げ、分離しておくために宗教と言語のちがいを用いた「自然の意志」だとした。言語や宗教のちがいを超えて永遠平和のために努力しなければならないが、自然は人間のこの努力に協調するのであって「自然が永遠平和を保障する」というのである。

最近（〇五年一〇月）のイギリスＢＢＣ放送によると、パレスチナ自治政府のシャース副首相との〇三年の会談でブッシュは「ジョージ、イラクへいって圧政をとめてこい」と神が告げたといったらしい。アメリカの大統領府はバカげていると否定したが、ブッシュは当初からイラク戦争を神の意志＝十字軍だといい、「文明の戦い」だといっていたのであり、「第一の優先課題は軍だ。神から呼びかけられた最高の使命だ」と議会で演説した。こうしたブッシュの原理主義的神がかりについては、Ｅ・Ｗ・サイードも『裏切られた民主主義』（中野真紀子訳、みすず書房、〇三年）のなかで、ブッシュは自

身でじかに神や神意（プロヴィデンス）と接触があるといっている（拙稿「ブッシュ戦争断章」、『予後の風色』）と書いていたものである。

こうしてブッシュは彼が信じる「邪悪な神」の意志にしたがって、カントのいう文明や民族が共存する「自然の意志」に真っ向から挑戦したのである。ちなみに、ヒトラーも侵略行為を「神の摂理（プロヴィデンス）」といった。

この『永遠平和のために』が出版されたのは一七九五年のことだ。同じ頃の近代政治思想にとっての記念碑的な労作である、アベ・シエイエスの『第三階級とはなにか』（一七八九年）、トーマス・ペイン『コモン・センス』（一七七六年）などを、わたくしは学生時代に自分の反ファシズムの思想形成と民主主義理解のために読み漁っていたのだが、いまあらためて二百年以上もまえのカントの先見性に目を見張る。

二、

〇五年九月の総選挙で自公両党が合わせて衆議院の三分の二を超える議席を獲得し、小泉自民党が圧勝したことから、わたくし宛の手紙の文面に「日本はこれからどうなるんでしょうか」という意味の言葉がよく見られるようになった。

わたくしとしても、日本の政治は最悪の事態になったという認識があるから、テレビに映る得意顔の小泉首相や石原の顔を激しい嫌悪感があって見ておられない。それらの顔が表象するものが「不正義」だからだ。

こんどの選挙は、「小泉劇場」の種も仕掛けもある手品師に喝采をおくったといった印象だ。彼の「構造改革」といっても、どれもこれも大企業本位で、国民には増税だけをかぶせるロクなものはないが、やる気はあるわけだし、いまの閉塞状況を変えてくれるかもしれないと、リストラの失業者よりも、雇用されている人間のほうが圧倒的に多いわけで、そんな人たちが小泉の手品に拍手をしたのかもしれない。

わたくしの知らない金融問題もあって、あまり精確なことはわからないが、郵政民営化法というのは「百害あって一利なし」ということであるらしい。それを小泉は「公務員は減らさないでいいのか、小さな政府は実現できないではないか」といっていた。メディアも小泉を「改革者」として演出した。

『朝日』をふくめて大新聞は民営化推進だから、民営化批判は『しんぶん赤旗』を見るよりほかはなかったが、

郵政事業は独立採算で、郵政職員の雇用は税金とは関係ないだけでなく、事業収入にかかる民間の税金より高い率の分担金を利益から国庫に納めることになっているというのだ。そのように民営化が小泉の「小さな政府」と無関係だとすれば、小泉の言説はすべてウソの塊ということになる。これはとんでもない不正義だろう。

小泉はこんどの選挙中に「改革をとめるな」「公務員を減して小さな政府を」「『民』に出来ることは『民』に」などと声高にいっていたが、大して強力でもない「敵」をつくったうえで、内容の説明もなく、極端に単純化して訴えるスタイルは、ヒトラーの手法に似ていると思った（後述）。むろん「民」とは大企業のことだ。

軍隊や戦争など民間ではできないことだけを政府が担当するという「小さな政府」政策が破綻している姿は、ハリケーンで千二百人以上の死者を出すなど、貧困な黒人層が集中的に甚大な被害をうけたルイジアナのニューオーリンズの問題で劇的に明らかになりつつある。

災害対策をなおざりにしてきたブッシュ政権がその悲惨のまえに立ちすくんでいる。イラク、アフガンの戦費はすでに二千億ドル（二三兆円）に達し、これからも月々平均五六億ドル（六千四百億円）を支出しなければならない。その戦争の破綻もすでに明らかである。

「小さな政府」政策は権力の周辺にいる大企業など一部の人々だけが肥え太り、障害者「自立支援」法が重度障害者に重い「応益」負担を強いるように、「自己責任」をいいつのって、庶民の生活を切り捨て、その悲惨を放置するものである。国連憲章を事実上否定する米日のような「小さな政府」論は、福祉などの国家責任を放棄して「邪悪な人間」だけを拡大再生産しつづける。

二、反知性

一、

昨年たまたま、日本ではほとんど知られていないイスラームの一四世紀初頭、日本では鎌倉末期の歴史書をひもといてみた。わが国初訳のイブン・アッティクタカーの『アルファフリー』（池田修他訳、平凡社、〇四年）である。これは諸王朝の君主、宰相の治蹟録なのだがすぐれた君主・宰相論でもある。

その本論の冒頭で優れた君主・宰相の特質をプラトン流に一〇項目をあげる。その第一は君主の性質の根本としての「理性」である。その理性と結びついた「知識」もまた不可欠のものだ。知識は理性の果実であり、これによって王者たりうる。「王に知識がなければ、……荒れ狂った象のようなものだ。彼にはそれをとがめる理性も、それをやめさせる知識もない」

このような資質があってはじめて、公平な異教徒を邪悪なイスラム教徒より好ましいと判断することができる。これが君主に必要な「公正さ」である。これなしには君主たり得ない。

さらに「敬神の念」などイスラーム的特質をあげたあと、神の使徒（ムハンマド）は常に教友たちに相談したといって、コーランの「今度のことについても、彼らとよく合議せよ」という言葉を引用する。「相談したうえでの過ちは、ひとりで勝手に決めた正しさよりましである」

以上がその書物があげている君主や宰相の資質としての要素のうちの第一義的なものだが、ここでいわれている理性と知識の結合とは、通常わたくしたちが「知性」といっているものである。それでは、知性とはなにかを言葉でいえばどうなるか。

簡単にいえば「知性」（intellect）とは、主観的要素を知覚からとりのぞき、対象を抽象し、客観的に認識する能力のことであろう。それは完全な形における思考力であって、感性に対する概念である。したがって知性は理性（reason）と同義につかわれる場合が多い。知性的な人はつねに自己分析的であって、自分のことをも客観的に見つめることのできる人でもある。

〇三年に死去して、大江健三郎が「美しい知識人」といって哀惜した、アラブ（パレスチナ）出身のクリスチャン、コロンビア大学の比較文学の教授、E・W・サイードは前掲書のなかのイラク戦争直前の論説で「アラブ国家を支配している政権はおぞましいが」といったあと「わたしたちの伝統のなかには、社会や歴史などの問題を論じた言説が大量に存在するのだが、大きな展望と精神的な権威のある人物がそれを活用していない。わたしたちは今、大きな破局の前夜にある」と悲痛な筆致で書いた。

なぜイスラームの文化一般ではなく、とくに古い政治思想を知りたくなったかというと、現在のアラブ世界の後進性についての言説や映像による一般化が毎日

のように世界中に流布されており、E・W・サイードがいうようなアラブのすぐれた政治思想的遺産から現在を照射してみたかったからである。シーア派に属するイブン・アッティクタカーのこの書物こそそれにふさわしいと思った。

それでは、アメリカや日本の宰相やそれをとりまく権力者たちは『アルファフリー』の基準に照らして頭の程度はどんなものかということになるだろう。

この小文を執筆中の一〇月一七日に小泉首相は首相就任以来五度目の靖国参拝を敢行した。これによって日本のアジア外交は決定的に困難な局面にはいる。国益を損なうことまことに甚大である。日本が世界的に軽蔑の対象になることも避けられない。靖国神社は、太平洋戦争を正義の戦争として美化しているだけでなく、戦争犯罪を顕彰し、さらに国連憲章を敵視し、そのうえ東京裁判を受諾したサンフランシスコ条約という国際関係の大本をも否定する。いまやその犯罪的主張が世界中に知れわたっている特殊な運動組織である。

小泉は首相の靖国参拝に対する大阪高裁の違憲判決に対して「理解できない」としかいわなかったし、中国や韓国の批判に対しても「日本の慣習を理解できないのか、外国が心の問題に干渉すべきではない」*といって、それ以上の思考は停止しているもののようである。不公正で理性を欠いたその心がアジア外交を八方塞がりにしているのだ。

この小泉の犯罪的愚行が示すものは、かつて筆舌に尽くしがたい災禍を与えた異民族（この場合は中国や韓国、アジアの人々）のまっとうな要求に聞く耳をもたず、その犠牲になった子孫をことさらに侮蔑し、かえって自民族の極悪犯罪者（戦争犯罪者たち）を顕彰・擁護する不「公正さ」、非理性的で歴史を知ろうとする意欲もない、恥ずべき宰相の無残な姿である。自分の個人的な感情を最優先して、客観的に事態の本質を見つめる知性のかけらもない、偏執的幼児的資質の最低の宰相ということになるだろう。

＊　こんどの参拝は「一市民」としての略式であり、憲法十九条も「思想・良心の自由に対する不可侵」をいっていると国会で強弁したらしいが、姑息な略式といい、自分の立場についての無理解や、ひとりよがりで見当はずれの憲法理解といい、ほとんど知的未熟児の感がある。「一市民」ならむしろ町内のお地蔵さんにお参りした方がご利益があると思う。地蔵は「六地蔵」というように、東条らのいる無間地獄（むげん）を含む人間が関わる「六道」のすべてにいて、

現に教化・救済にあたっている。彼がこだわる「不戦の祈り」（ほんとかどうか）とやらも、地蔵なら東条以下に直接手渡しで届けてくれるかもしれない。

また、小泉のような内容の説明を省いた通俗的な「格言」や単純化した「フレーズ」の繰り返しを知性の対極としてどのようにみればよいか。

たとえば、ケガをした貴乃花が優勝したような世俗的な事柄に対する得意の「感動した」という本来は人間っぽい言葉は、歴代の宰相がいわなかった言葉としてはいっときは新鮮に響いたかもしれないが、繰り返されるとその内容の空疎さのために知性を疑われる。

〇二年元日の『朝日新聞』の文化欄に井上ひさしがその「感動した」を例にとって「感動詞から離れ、考えるヒトに戻ろう」と題して、接続詞のない思考方法を批判したことがある。「個人的で、感情的で、断定的な一語文、つまり感動詞をきっぱりした口調で繰り返し、聞くものに強い印象を与える。そうしておいて、最後は言っていたこととちがう、修正した政策を行う」というのである。

井上の論理をさきの知性論に即して敷衍（ふえん）していえば、事象を客観的に概念化して認識するのも、世界観を語るのも、接続詞や接続助詞を駆使して初めて可能なのであって、接続詞こそ考える人間をつくる、ということである。その人の知性は一語文ではなく、接続詞の駆使によってのみ形成され得る。

二、

『トーマス・マン論』などで知られるロンドン大学のJ・P・スターン教授はその著『ヒトラー神話の誕生』（山本尤訳、社会思想社、一九八三年）のなかで、ヒトラーの知的特徴を次のようにいった。「彼は多層的なあいまいな状況を忌み嫌い、価値評価や思考にニュアンスをつけることができず、人間も味方かさもなくば敵としか見ることができなかった」

実際にあらゆる複雑な問題も白か黒かに単純化する必要を、彼は『わが闘争』のなかで繰り返し語り、思考力のない愚かしい大衆はそうすることを強く要求している、といった。

ヒトラーの大観衆を前にした演説には、つねに新しい情報はなにもなく、おおむね内容のない話の繰り返しがほとんど宗教的ともいえる儀式になった。ヒトラーは新しい情報には聴衆の注意力が最大限に要求され

るために、演者と聴衆を結ぶ絆が極端に弱まることを知っていたのである。情報が最少量のとき聴衆は演者の言葉に飛びつき、いっせいに彼の発言を是認する。それは「賛成」か「反対」かである。

ここでJ・P・スターンが強調しているのは、この「賛成か反対か」がもつ単なる修辞上の単純化ということではなく、時代的反映の意味である。

　厖大な賠償金を含む過酷なヴェルサイユ条約によって天文学的なインフレに見舞われたドイツが、立ち直りかけると、ふたたび世界恐慌に打ちのめされ、大量の失業者が街にあふれる。ナチス政権はそこに登場するのである。政権三年後には軍需産業の興隆もあって失業は解消され、初期外交は成功していく。シュペングラーの『西欧の没落』の言葉ではないが、「耐え抜くか、さもなければ破滅――第三の道はない」状況だったといえるかもしれない。それはそっくりヒトラーの考えだった。こうしてヒトラーにカリスマ性が付与された。

　ナチスのすべてを破壊し尽くした侵略と残忍非道はこの小文の主題ではないからここではふれない。しかし、とJ・P・スターンはいう。「ヒトラーのこの『賛成か反対か』は、彼の打つ手の破壊的な、自己破壊的な性質ばかりか、あの時代のドイツ社会の体質をも暗示していることである。それは『賛成』への期待の彼方に、『反対』への深い憧憬を暗示している」

＊　＊　＊

　戯画的に描くことは、本質をえぐらないかぎりかえって浮薄の誹りを免れないから、自信がなくこれまでやったことはないが、最後にあえて試みればつぎのようになるだろう。

「備えあれば憂いなし!!」「イエス」
「改革をやめてもいいのか!!」「ノー」
「郵政民営化もできないで、なにが改革だ!!」「イエス」
「小さな政府のために、増税は我慢しよう!!」　少し間をおいて「イエス」
「靖国神社に参拝するのはよくないことか!!」「ノー」
「感動した!!」「ワアオー!」

　一方に、そんなやりとりを苦りきって見ているそれ以上に厖大な大衆がいることも確かだ。わたくしはスターンの『反対』への深い憧憬を暗示している」という言葉が気にいっているのである。

（やぎ　みつお・にいがた県民教育研究所所長）